

課名	疾病感染症対策課
担当	藤田、松岡
内線	3365、3368
直通	226-7331

## お知らせ

### 伝染性紅斑（リンゴ病）の患者が急増しています（注意喚起）

県内における第34週（8月18日から8月24日）の伝染性紅斑の定点当たり患者報告数が1.50人となり、1999年の統計開始以降の最多を更新したため、その後の状況を注視していたところ、第35週（8月25日から8月31日）には、さらに最多を更新する1.89人（国が示している警報基準値「2.0人」）となり、今後も患者が増加することが懸念されるため、次のとおり県民への注意喚起を図ります。

#### 1 伝染性紅斑とは（小児を中心に見られる流行性の発しん性疾患）

【原因】 ヒトパルボウイルス B19

【好発年齢】 5～9歳の患者が多く、次いで0～4歳が多いとされています。

【感染経路】 咳やくしゃみなどの飛沫による感染、接触による感染

【潜伏期間】 約10～20日

【症状】 ・潜伏期間後に、微熱や、かぜ様症状が見られることが多いです。

→ウイルスの排出が最も多く、周囲の人が感染しやすいため、注意が必要な時期です。

・その後、両ほほがリンゴのように赤くなります（紅斑）。

→ウイルスの排出はほぼなく、周囲の人への感染力はほぼ消失しています。

・続いて、体や手・足に網目状やレース状の発しんが広がります。

・成人が感染した場合は、関節痛や頭痛などの症状が出ることもあります。

#### 2 基本的な感染防止策が重要です

・飛沫感染を予防するためには、咳などの症状がある時には、場面に応じてマスクをするなどの咳エチケットが有効です。

・手に付着したウイルスによる接触感染を予防するためには、石けんと流水による手洗いが有効です。

#### 3 かかったときは

・特別な治療法はありませんが、基本的には軽い症状であるため、症状に応じた治療となります。

・伝染性紅斑を予防するワクチンはありません。

・妊娠中又は妊娠の可能性のある方は、「4 注意すべきこと（妊娠中又は妊娠の可能性のある方へ）」のとおり、特に注意が必要です。

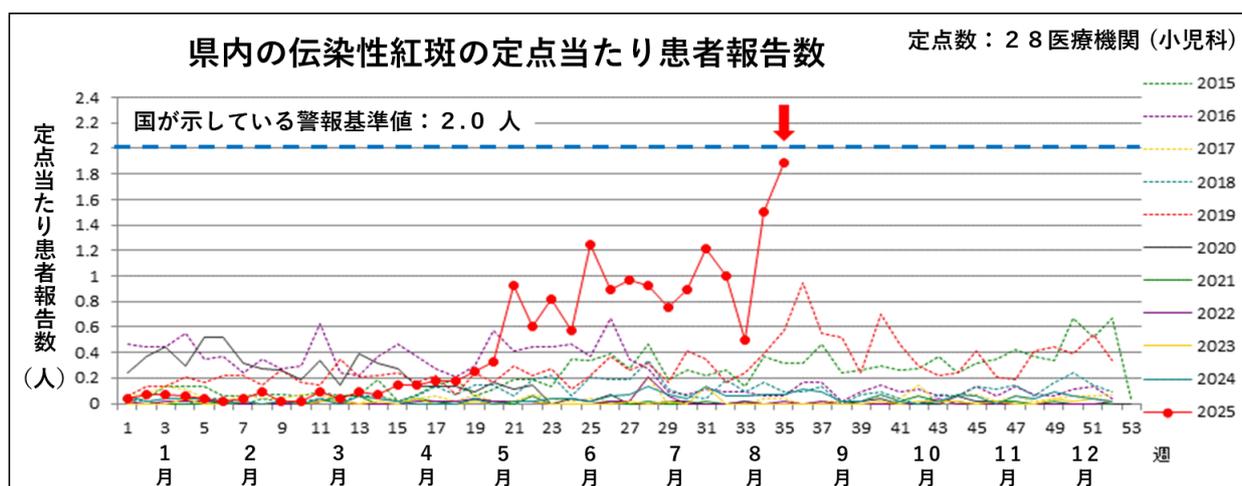
#### 4 注意すべきこと（妊娠中又は妊娠の可能性がある方へ）

- ・これまで伝染性紅斑に感染したことの無い女性が妊娠中に感染した場合、胎児にも感染し、胎児水腫などの重篤な状態や、流産のリスクとなる可能性があります。伝染性紅斑を疑う症状がある場合は、医療機関に相談しましょう。
- ・また、感染しても症状がない場合（不顕性感染）もあるため、周囲に伝染性紅斑の人がいる場合は、妊婦健診の際に、医師に伝えてください。
- ・伝染性紅斑の家族がいる場合や、多くの小児と接する機会がある職業の方などは特に注意が必要です。かぜ症状がある方との接触をできる限り避け、手洗いやマスクの着用などの基本的な感染防止策を実施してください。

（参考）

県内の伝染性紅斑の定点当たり患者報告数掲載ホームページ（毎週更新）

岡山県感染症情報センター（<https://www.pref.okayama.jp/page/565068.html>）



でんせんせいこうはん

# 伝染性紅斑

両頬に赤い発しん（紅斑）が出ることから「リンゴ病」とも呼ばれる小児に多い感染症です。



10～20日の潜伏期間の後  
**微熱・かぜ**に似た症状

この時期にウイルスの排出が最も多くなります。



こんな症状がみられます

ほっぺたがリンゴのように赤くなります（紅斑）

発しんが現れたときにはウイルスの排出はほとんどなく、感染力もほぼ消失しています。発しんは1週間程度で消失しますが、中には長引いたり、一度消えた発しんが短期間のうちに再び出現したりすることがあります。

## 予防と対策

手洗い、マスク着用など



基本的な感染症対策を心がけましょう！

伝染性紅斑の主な感染経路は、「飛まつ感染」と「接触感染」です。こどもを感染から守るため、周囲の人も基本的な感染症対策を心がけましょう。

## 妊娠中又は妊娠の可能性がある方へ

これまで伝染性紅斑に感染したことがない女性が妊娠中に感染した場合、胎児にも感染し、胎児水腫などの重篤な状態や、流産のリスクとなる可能性があります。熱や倦怠感が出現した後に発しんが出るなど、伝染性紅斑を疑う症状がある場合は、医療機関に相談しましょう。また、感染しても症状がないこと（不顕性感染）もあるため、周囲に伝染性紅斑の人がいる場合は、妊婦健診の際に、医師に伝えてください。



詳しくは、厚生労働省ホームページをご覧ください

